子規と漱石の交流メモ

　子規の「七草集」から漱石の文学志向の契機となった「木屑録」（房総漢文紀行）に対しての子規からの評価、感想を描いている。たいへんありがたく思いました。

　このあと、「木屑録」の漱石の房州讃歌に魅了され、二年後の明治２４年３月２５日、房総を縦断する行脚にでた子規は房総紀行「かくれみの」を執筆しています。

　子規の「木屑録」に対する感想は、関宏夫氏の手紙「ロンドンの焼芋」暮らしの手帖社 の著書の中に子規の「木屑録」総評として書かれており、つづいて、蓑笠行脚「かくれみの」についても丁寧な解説がなされていました。

　ここら辺の経緯は、関さんの房総紀行「木屑録」漱石の夏休み帳 崙書房出版が大変参考になります。
 漢文読み下し、解読は、高校生以来の懐かしい学習でした。

　近代日本文学史上、燦然と輝く明治の文豪・夏目漱石と近代俳句の祖・正岡子規との友情の舞台が房州の鋸山（千葉県安房郡鋸南町保田）にあります。
 正岡子規が明治２２年５月に詩文集『七草集』を親友の夏目漱石に示すと、漱石は丁寧な批評を寄せました。

『七草集』に触発された漱石は、同年８月房総を周遊して漢文紀行『木屑録』を執筆して子規に届けました。子規はこれを激賞しました。ともに詩文の友であることを確認しあったのです。『木屑録』には、房州鋸山の悠久と自然の美しさが綴られております。

　２年後の明治２４年春、子規もまた更なる詩想を求めて房総を周遊し鋸山山頂からの眺望を漢詩に綴った紀行『かくれみの』を書きました。これを読んだ漱石は子規の着想のよさを讃えました。

 以降、二人は生涯にわたっての絆を深めて参ります。のちに漱石は『こころ』などの作品に房州の自然や地理を取り込み、子規もまた房州の地名を織り込んだ俳句を数多く詠んでおります。

 平成２９年には漱石・子規ともに生誕（慶応３年・１８６７）１５０年を迎えます。